

所報

No.138
令和4年10月21日

富山県総合教育センター 富山市高田525

E-mail:center@tym.ed.jp(代表)
URL:http://center.tym.ed.jp/

目次

- 夏・ステップアップ …………… 1
- 夏の研修を振り返って …………… 2・3
- センター事業より …………… 4
- 研修顧問特別寄稿 …………… 5
- 随想 …………… 5
- 連載「知って得04」 …………… 6

夏・ステップアップ

教育研修部



新規採用教員研修会(幼稚園教諭・保育教諭)
9月2日「幼児の造形遊び」



新規招致外国青年富山オリエンテーション
8月26日「立山現地研修」



理科教育講座(自然観察 入門コース)
7月26日「地層の剥ぎ取り(立山町)」



授業におけるICT活用研修会(PowerPointを使った教材作成コース)
8月24日「Zoomのブレイクアウトルームでの協議」

科学情報部

教育相談部



学校カウンセリング講座(人間関係を育む学級集団づくりコース)8月2日
演習「集団の中で個と個の関係を結ぶことの大切さについて考える」



特別支援教育講座(子供の特性が分かり支援に生かせるアセスメントコース)7月21日
演習「[子供のために先生が気づいて動けるチェックリスト]の活用」

東海北陸教育研究所連盟総会・第107回研究協議会が富山県に集合して開催されました

9月8、9日に東海北陸6県の10教育機関130名が、事業の伸展を図るため、会場の富山県総合教育センターに3年ぶりに参集しました。総会に続き、研究協議会4部会では本センター研究主事を含む15の提案発表が行われ、活発な協議が交わされました。また、今回設けた「情報交換の時間」には、昨今の教育問題や喫緊の課題について、各機関の現状や対策等を参考にしようと熱心に話し合う姿がありました。

閉会時には次期開催県の岐阜県総合教育センター長の挨拶をいただき、2日間の日程を終えました。



夏の研修を振り返って

教育研修部

先輩から学ぶ・体験から学ぶ初任者研修(小)「水泳指導法・水上安全指導」

- ◆日時 令和4年6月9日(木) 14:00～16:30
- ◆場所 富山県総合体育センター
- ◆講師 県内小学校教諭等 11名
- ◆内容

小学校の現場では水泳指導を行うところが多いことから、今年は感染対策に留意しながら実際にプールに入水して研修を行いました。

講師は、小学校で水泳指導をしている先輩教諭です。

受講者は担当学年毎の班に分かれ、水泳指導法や安全指導、着衣水泳の実施方法等を教わりました。児童の特性や発達の段階に応じた指導方やコツ・教具の扱い方等を体験しながら学んでいきました。



指導者から指導のポイントを聞く



子供の気持ちになって浮く体験

受講者の声

- ◎実践しながら楽しく学ぶことができた。自分が習うのと人に指導するのでは全く違うことがよく分かった。
- ◎声のかけ方一つで楽しくなったり場が引き締まったりすることが改めて分かり、言葉のバラエティを増やしたいと思った。
- ◎命を預かっているという意識を常にもって取り組みたい。
- ◎学校のAEDの設置場所、職員室との連絡手段等、子供の安全に関わることで気を付けることを確認しておきたい。

科学情報部

授業におけるICT活用研修会(クラウド入門コース)

- ◆日時 ①令和4年8月1日(月) Microsoft Teams
②令和4年8月4日(木) Google Workspace for Education
- ◆受講者 高等学校及び特別支援学校教諭 計33名
- ◆内容

「クラウド入門コース」は今年度新設したコースです。各学校で使用している教育用クラウドサービスに対応するため、Microsoft TeamsとGoogle Workspace for Educationに分けて実施しました。

研修は、以下の内容について演習形式で行いました。

- ・各教育用クラウドサービスを利用した課題の作成、配付、提出、返却
- ・Microsoft FormsやGoogleフォームでのアンケートの作成、配付、回答、集計
- ・WordやExcel、PowerPoint等の共同編集

集合研修で実施したので、うまく操作できないとき等、その場でサポートすることができました。



講義の様子

受講者の声

- ◎Formsを使ったことがなかったので2学期から使ってみたい。自分が子供たちにFormsを通して課題を出すだけでなく、子供たちにもFormsを使う技術を身に付けさせたい。
- ◎Jamboardやクラスルームの機能について初めて知ったことばかりだったので、他の先生方との会議や研修に役立てたい。



Microsoft Teamsの画面



Google Classroomの画面

学校カウンセリング講座（みんなが生きるチーム支援コース）第2回

— 子どもを中心に考えるチーム支援 —

このコースは、児童生徒をとりまく関係性や援助資源に関する情報を共有し、一人ひとりが持ち味を生かして役割を担うチームによる支援について考えることを趣旨とし、第1回は6月、第2回は8月に実施しました。第2回について紹介します。

- ◆日時 令和4年8月24日（水）
- ◆講師 富山県総合教育センター 館野 智子 客員研究主事
- ◆演題 「みんなが生きる子ども支援」
- ◆内容

午前は、子どもに関わる情報を集めて共有し、情報を理論や経験でつないで意味づけることで援助ネットワークができ、それが機能してチームになることについて講義を受け、受講者一人ひとりが自身の関わる子どもについての援助資源を整理しました。

午後の演習では、架空事例によるケース会議(ep)を体験しました。また、受講者の関わっている子どもの事例をもとに、様々な角度から子どものもつ自助資源・援助資源について検討し、子どもへの支援のあり方について協議しました。



実際の事例について検討
多くの質問や、見立てや手立てについての意見が出て、
この場にも「チーム」が生まれました。

受講者の声

- ◎エピソードプロセス（ep）を使ったケース会議は、30分という短い時間でできること、また、問題行動になる前の気になる段階で話し合い、手立てを考えることができるので、ぜひ勤務校で活用していきたいです。（小学校教諭）
- ◎話し合いがいろいろなものを生み出すことを味わえました。チーム力を上げるために、教員の同僚性を高めていきたいと思います。（中学校教諭）
- ◎演習「一人脳内ケース会議」では、何がわかっていないのか、どんな手立てが残っているのかが見やすくなりました。生徒を取り巻く環境が複雑になればなるほど、情報を整理することが必要と感じました。（高校教諭）



架空事例を使い、ロールプレイで
ケース会議を体験

特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり 第2回

— 通級による指導を通常の学級での指導に生かす —

この講座は、通級による指導の実践や、通常の学級の担任と通級指導教室担当者との連携の具体を研修することを趣旨とし、第1回は6月に明星大学教授、小貫悟先生によるオンライン研修、第2回は8月に参集しての研修を実施しました。第2回について紹介します。

- ◆日時 令和4年8月2日（火）
- ◆講師 魚津市教育委員会特別支援教育コーディネーター 印田 幸代 先生
- ◆演題 「通級指導教室担当者と通常の学級の担任等との連携の在り方」
- ◆内容

講義では、実態把握から実際の指導に至るまでの考え方や、在籍学級の担任と連携するための工夫について多くの具体例を示しながらお話いただきました。

班別協議では、通級による指導の成果を在籍学級で生かすために取り組んでいることや、課題と感じていることについて話し合い、どうすれば子どもにとって通常級での学習や通級での指導が有益なものになるかを学び合いました。



講義の様子



班別協議

受講者の声

- ◎通級指導の具体的内容について詳しく教えていただき、2学期の指導に早速生かせるものがありました。（小学校教諭）
- ◎通級担当の先生方、自分と同じ通常級の先生方と、困っていることや取り組んでいることを共有することで、学級の児童を思い浮かべながら学ぶことができました。（小学校教諭）
- ◎担任、教科担任、通級指導担当の間での情報交換はやはり難しい、でもやはり重要だと改めて感じました。（中学校教諭）

センター事業より

中堅教諭等資質向上研修「社会体験研修」 (主管 教育研修部)

社会体験研修は、高等学校、特別支援学校教諭及び特別支援学校勤務経験のある小・中・義務教育学校教諭を対象とした体験型研修です。民間企業をはじめとした学校とは異なる環境での体験を通して、豊かな人間性や社会性の育成、教養、礼儀作法の習得、対人関係能力の向上、視野の拡大等を目的としています。

今年度は、33か所の事業所のご協力を得て、70名の教諭が研修をさせていただいています。

保護者、地域、関係機関との連携・協働のネットワークを形成していく力が、これまで以上に求められる中堅教諭にとって、社会体験研修は資質向上に適した機会となっています。



説明を受けて熱心に
取り組む受講者

受講者の声

◎職員の方々は、お客様からの質問に大変丁寧にわかりやすく説明しておられ、高度な専門性を感じた。優しく、思いやりの気持ちをもって接しておられる姿が印象的であった。

◎体験を通して、学校現場にも共通する部分があると感じた。一つ目は、全体への目配りの大切さ。二つ目は、情報共有し連携することの大切さである。中堅教諭としての自覚をもって成長できるように努めていきたい。

理科に関する生徒実習

—学校では実施しにくい観察・実験を経験—

(主管 科学情報部)

科学情報部(理科)では、7月に高校生を対象にした観察・実験の実習を行っています。生徒は、一日に2講座を選択し、学科・コースの特性に応じて科学への理解を深めています。

今年度は、入善高校・普通科自然科学コース、富山高校・理数科学科、富山いずみ高校・看護科、富山東高校・自然科学コース、高岡高校・理数科学科、氷見高校・普通科文理探究(理系)コース、南砺福野高校・普通科探究(理系)コースから総数245名の生徒が参加しました。

参加した生徒からは、「普段、体験できないことだったので新鮮に感じた」「どの分野も少しレベルの高い実習だったのでとても興味深い経験になった」「カエルの解剖では、体の仕組みについて深く学ぶことができた。大切な命をいただき感謝したい」「難しかったが、科学はとても楽しいと思った」という声が聞かれました。



光ディスク(CD、DVD、BD)の
トラックピッチの測定(物理)



最新機器によるビタミンC
の定量分析(化学)



ウシガエルの解剖(生物)



アンモナイトの研磨と
内部構造の観察(地学)

体験交流活動「プレイパーク」

(主管 教育相談部)

文部科学省補助事業「不登校児童生徒に対する支援推進事業」の一環として、県内の小・中学生とその保護者を対象に、毎年、2回の体験交流活動を実施しています。

今年度の第1回は7月8日(金)に、総合教育センターで「プレイパーク」を行いました。これは、創作活動や体験活動を通して、自分を表現したり人との交流を楽しんだりすることを目的とした活動です。

段ボール迷路や壁画作りなど、広い空間で遊ぶ「プレイランド」、紙コップ等でロケットや鉄砲を作って遊ぶ「おもちゃランド」、材料を自分で選び、しおりやプラ板等の工作を楽しむ「手作り工房」、いろいろな楽器で楽しむ「音楽ランド」の4つの広場を教育センター内に設け、約20種類の体験コーナーを開設しました。「プレイランド」の段ボールタワーでは、子どもたちは箱を高く積んだりくずしたりして歓声を上げていました。「おもちゃランド」では、「アルソミトラ」を模した発泡スチロール製のグライダーや紙コップロケット等をつくり、飛び具合を確かめながら試行を楽しんでいました。

ALTの協力によるプレスレット作りやフィリピンの伝統的な遊び、NPO法人ヴィストカレッジの方々の手ほどきを受けてのプログラミング体験等にも挑戦しました。参加した子どもたちは、ゆったりとした時間の流れの中、自分のやってみたい活動に思い思いに取り組んでいました。



ALTとの交流を楽しんだ
「プレスレット作り」



どんどん高く積んでみよう
天井まで届く「段ボールタワー」

「三角形の面積」の記憶

研修顧問 坪池 宏

小学校5年生の算数の授業を時々思い出す。既習事項である長方形の面積の求め方を元に、子供たちが主体的に多様な発想で三角形の面積の求め方を追究していく場面である。担任の先生は、公式などの結論を教えることはせず、子供たちが習得すべき知識を自らの発想で獲得するのを支援する。子供たちがつまづく場面では、適切にヒントを提示しながら授業を進めていく。教師はファシリテーターのような役割を担う。この日の授業は、多様な意見をすり合わせながら課題を追究する過程が楽しかったこと、多くの先生方が参観した、いわゆる研究授業であったことから、記憶に残っている。

この授業が行われた昭和43年に、アメリカの「スプートニク・ショック」に伴う「教育の現代化運動」の影響を受けた学習指導要領が告示されている。この時の改訂は、教育内容の面では、濃密なカリキュラム（特に算数・数学、理科）が組まれた。例えば、算数では新しく「集合・関数・確率などの新しい概念」が採用され、正方形・長方形などの基本的図形は低学年で扱うなど、指導の段階を早めるように示された。一方で、指導法としては、教科の基本概念は結論的知識として教え込むのではなく、自らの探究活動（「構造

を発見させるプロセス）を通して子どもの興味・関心を喚起する「発見学習」が流行する。あの日の授業はその先駆けとなる実践ではなかったかと想起している。

当時の教員集団は、戦前の徳目主義、戦後の経験主義、その後の系統主義（前回の学習指導要領）など、その都度、新たな教育理念と自分の立ち位置との相対化を迫られていたのではないかと。担任の先生や参観していた先生方はそれぞれの立場からあの日の授業をどのように評価したのか、気にかかる。

日本における教育の現代化運動は、その教育理念は学校現場において十分に浸透されないまま、高度経済成長の影響を受けた単なる詰め込み教育であったと揶揄され、昭和52年学習指導要領の改訂では、「ゆとり教育」へと舵を切ることになる。

その後、学習指導要領は、幾多の変遷を経て、探究活動が重視されるようになった。こうした経緯を踏まえ、今、教育の現代化運動における教材観（「構造」や「転移」）や発見学習の手法を再評価し、探究活動を考えるヒントとしたい。



神様からのメッセージ

教育研修部長 出口 信夫

現在は、6年次教職員研修会の次に、中堅教諭等資質向上研修（7～11年次）を行い、11年次教職員研修終了後5年目を迎えたときに16年次教職員研修を行います。

昭和63年採用の私たちのころは、勤続6年次教職員研修会の次は、採用後12年を経験した後、中堅教員研修会（いわゆる13年次研修）を行っていました。6月の午後に「中堅教諭の役割について」の講演を受講し、8月から11月の間の3日間、体験研修を行いました。私は自宅近くの特別養護老人ホームにお世話になりました。一緒に研修させていただいた違う校種の先生や老人ホーム内の職員の方々ともすぐに打ち解け、貴重な経験をさせていただきました。その間、体験研修をしながら「未来の自分をお世話する機会を得たんだろうなあ」と思いながら、職員の方々に指導をいただき作業をしていました。

最終日の午後、たまたま無表情な男性が介護福祉士さんに車いすを押してもらいながら私の前を通り過ぎて行きました。その時、一緒に作業をしていた職員の方

方が私に言った一言にひどくドキリとしました。「あの人、学校の先生だったんですよ。」

多分、教員として研修を受けていたので、何気ない一言だったのだとは思いますが、しかし、その瞬間、私には「今は、先生として何の不自由もなくしっかり働くことができるけれど、いつか少しずつできなくなることも出てくるんですよ。今を当たり前だと思わずに感謝しながら生きていきましょう。そして、いずれは周囲の皆さんのお世話になるんですよ。」と言われたような気がしました。

直接自分に言われているわけではありませんが、ある人が他人のことを話しているのを聞いているときに、ドキリとすることがたまにあります。これは神様がその人の「口」を借りて、私に何かを伝えようとしているように感じられてなりません。歳を重ねるにつれて直接的に助言をいただける機会が減ってはいますが、神様からのアドバイスを聞き漏らさないように注意深く日々を過ごしていこうと考えています。

Science
Cafe

植物の形やつくりには意味がある

科学情報部 研究主事 二塚 裕子

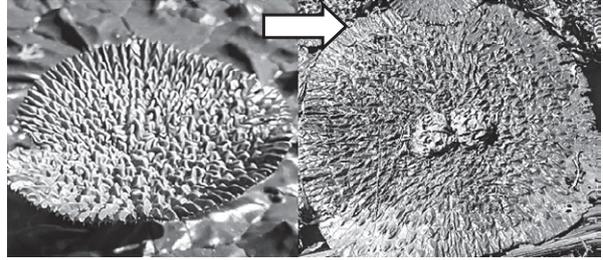
植物を見る時「どうしてこんな形?」「なぜこんなつくり?」と疑問をもって観察することがありませんか。私たちは、植物の形やつくりを、種類を見分ける基準としてとらえることが多いです。しかし、植物の見た目の違いには、植物の生き方の違いが反映されており、そこには生きるためのしくみが隠されているのです。「この植物の形やつくりにはどんな意味があるのだろう」という視点で植物を観察してみませんか。

写真の植物はオニバスです。9月初旬、氷見市十二町で観察しました。オニバスは、水面に浮葉を浮かべ、水底に根を張る植物です。葉は大きいもので直径1mを超え、水面一体を覆います。オニバスの葉は、水面に浮かぶことから、気孔が陸上植物と異なって葉の表面に発達しています。また葉の裏にある肥厚した葉脈は、葉を支えるとともに、空気をため浮力の助けとなっています。強固な葉のつくりに見えますが、水から上げると自重を支えることができません。

水があるからこそ、この葉を支えることができるのです。またオニバスは、水深の深いところや、水位の変化しやすいところでは繁茂しにくく、生息域は小さな池や沼地に限られています。葉を大きく広げると、他の植物の繁茂を妨げ、池水の蒸発を防ぎ、湿地化



氷見市十二町のオニバス

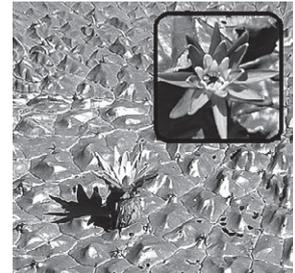


オニバスの葉

させないことにもつながっています。そして表面にある気孔から水を蒸散させ、池の水を低い水位で安定させることで、オニバスの生息しやすい環境をつくります。

種子のつくりもよくできた仕組みです。オニバスは栗の毬のような果実をつけ、その中にたくさんの種子をつくります。種子は寒天のような仮種皮に包まれて水に浮きますが、その寒天の部分が腐ると水にしずむ仕組みになっています。よって、しばらく浮いて移動し、そのうち沈んで定着します。オニバスはこのようにして分布域を広げようとしているのです。

植物は、生き方に様々な工夫を凝らしていることが分かりますね。



オニバスの葉の表面と花

教育相談
連載

共に学ぶために

教育相談部 客員研究主事 舘野 智子

夏休み中、当センターでは教員研修がたくさんありました。教育相談部でも、4コース(教育相談、学級集団づくり、事例検討、チーム支援)それぞれ2日間の日程で、カウンセリング講座を企画運営しています。午前には心理学や教育学の専門家による講義、午後はスタッフがファシリテーターとなって講義とリンクした演習を行います。

長く続いている講座ですが、毎年ブラッシュアップしています。スタッフは、各講座のねらいを踏まえ、受講者の姿を思い浮かべながら演習内容の検討を繰り返します。話し合いが夜遅くまで続いたり、演習で使うワークシートを当日差し替えたりすることもあります。ファシリテートにシナリオがあるわけではなく、スタッフは受講者とのやり取りの中で自分の力を試すことになります。その場で出される問いに、「いまここ」で考え、湧きあがった言葉を返すわけです。子どもや保護者を前に日々行っている教育相談とまったく同じです。



例えば、「悩みを抱えた子どもを見分けるコツはありますか?」と聞かれたら、みなさんはどう答えますか。スタッフなら、相談に来ている子どもの言葉を振り返って考えます。おそらく、悩みや苦しみのない子はいない。だとしたら、悩みのあるなしを見極めようとは思わないし、「全員が何か抱えていると思って接します」と答えるでしょう。受講者の問いかけによってスタッフ自身のものの見方や捉え方を確かめる瞬間です。その場にいる受講者も一人一人、問いかけに耳を傾け、「自分ならば」と考えています。

教育相談部が昨年度から行っている研究では、学校に出向いて行う心理教育プログラムを改編しています。その軸となる「**自他理解/受容**」と「**コミュニケーション**」は、カウンセリング講座に通底していることをスタッフは実感しています。相談、研修、研究の往還がここにあるのです。子どもと先生が向き合い、相互の成長を目指して共に在る。そんな学校現場への貢献が、私たちの役割であり、願いです。